

文化的再生産からのアプローチ — ブルデュー理論および
若干の調査を踏まえて

宮島 喬（お茶の水女子大学）

文化的再生産とは、社会構造が、文化的な諸条件の作用を通して、時間のなかで多少とも同形的に再現され、維持されていくことと理解しておきたい。従来の研究では、再生産されるものとして、階級・階層構造に主に関心がむけられてきたが、社会諸構造というとき、当然、性別役割や男女間権力の構造がふくまれるとすれば、そこに重要な研究領域が設定されうる。ジェンダーとは、生物学的な雌雄としての性ではなく、文化的・社会的に形成される男女の差異である以上、それが維持されうるという事実は、当然、文化的再生産の観点から明らかにされる必至があろう。ただし、実際の研究では、再生産されるものとして、「男らしさ」、「女らしさ」の観念、男女で分化する就学コース、就業上の差異・差別、家庭内外の性別役割分業など、なんらかの具体的対象に照準を合わせることが必要で、包括的な社会システム上の秩序（「家父長制社会」などと表現される）の再生産まで対象とすることは困難である。

ブルデューとバスロンも、階級・階層の再生産と微妙にクロスするものとしてのジェンダーの再生産に事実上関心をしめしている。たとえば、大学進学において、特に女子が文学部に登録する比率が高くとりわけ中下層階級出身者にこれがいちじるしいことに目を向けていた（1964、1970）。こうした傾向は、両性間の「分業」の伝統的モデルのある反映ないし置換であることはまちがいない。その関係はまず、「女らしさ」についての社会的規定が、文化的・社会的につくられていて、それが内面化されていることに基づく。次ぎに、この「女らしさ」に結びついて選び取られる言語への志向が、彼女たちを或る

る文学部の専攻へとおもむかせるが、その言語行動は、学校の場で基準化されている「言語能力」（抽象語、理念語をあやつる能力）にてらして低く評価される（1970）。それが女子学生を学校的競争の場で不利な位置におくことが暗示されている。

ここでブルデューらは、「女らしさ」の観念の第一次的な文化的構成物が、それにふさわしいとみなされる一連の好みと行動様式を生みだし、それが二次的に、一定規準からみた「能力」へと置き換えられ、サンクションを付されるという過程に注目している。この二次的な置換によって、「能力」の問題という普遍的・中立的な装いをおびた評価の場にこれが移される点に、教育特有の論理をみている。いま一つ、かれらの考察の特徴をなすのは、ジェンダーをハビトゥス的なレベルで捉えようとしている点である。すなわち、社会化のなかで習得され、ほとんど無意識のなかで自明視された知覚や表象をうみだす機制と化した性向として、多くの男性あるいは女性において、社会的に課される「～らしさ」の規定が、むしろ「適性」として感じられるようになるという事実もこれによって説明されている。こうしたブルデューらの示唆にしたがい、本報告者は文化的再生産のメカニズムの一端をとらえるべくそれぞれ高校生、大学生を対象とする二つの調査を行った（必ずしもジェンダー問題を主題としたものではないが）。そこでは次ぎのことが確認された。

我が国では女子が男子と比較的同等のライフプランを考えがくとき、進学希望としては四年制大学への志向が示されると仮定される。そこで、女子高校生のこのような進学志向と相關する文化環境的な要因をみていくと、父親の職業、父母の学歴などとならんで、母親の性別役割観の脱伝統性が特に有意に働いていることがわかった（宮島・田中、1984）。ということは、母親の態度という文化的要因が特に注目されなければならないことを意味する。この点、ブルデューらのとってきたアプローチは、父親の職

業をメルクマールとする階級的出自と、性特性の「社会的規定」を重視するもので、不十分であるといわざるをえない。社会化エージェントとしての父、母の影響を弁別的にとらえることが必要となる。なお今日、母親が「文化的再生産のための決定的な準備エージェント」（バーンスティン、1980）をなしているみることができるならば、上のことは戦略上、いっそう重要だろう。

他方、大学生を対象とする調査では、文化の序列の評価のように男女の差がそれほど認められないもの（男性的価値観への同調か）や、言語能力や学ぶことへの態度におけるように男子と同等ないしそれ以上に学校文化への適応をしめしているものがある。また、文化活動の面でやや顕著にあらわれる男女の差は、むしろ階層差とかなり重なっているようである（藤田英典他、1987）。ただし、個々にみると、ジェンダーにむけての社会化がすでに先行していて、その結果ではないかと推測されるケースもみられる。結局、女子学生の場合、「女らしさ」への社会化をこうむってきながらも、これをある程度否定し、またある程度他の能力や行動様式（たとえば学ぶ態度におけるきょううめんさ）に変換しながら、制度への適応をはかっているといえるのではないか。そして、おそらくこの適応は必ずしも手段的にではなく、ハビトゥス的なレベルでも行われているとみられる。

文化的再生産論は、批判的な視角を内在させているものであるが、その論理の立て方はともすれば「制度的機能主義」（ブルデュー理論へのM.カーノイの評）との批判をまねくおそれもある。すなわち、再生産のシステムを仮定する際に、政治、経済、教育、文化、価値などの相互間の葛藤や対立を無視ないし過小評価する傾向がある、という指摘である。このことはジェンダー問題を扱う際にも留意すべきであろう。たとえば「女らしい特性」についての社会的規定は、つねに矛盾を意識せずに無意識のなかで習得されるとは限らない。ことに高等教育就学女子においてはこれへの抵抗

とみられる態度がうかがわれる。また、その「内面化」とみられる過程が、別の観点からは、対抗的な価値の構成として解釈されることもある（この点では、P. ウィリスが労働者子弟の価値志向について行った反学校文化の形成という読み取りが参考になろう）。ジェンダーの問題にかぎらないが、行為者の意味世界も解釈にくみ入れることによって、再生産過程についての図式主義的な理解を克服することは必要なことであろう。

Bourdieu & Passeron, Les héritiers, 1964

———, La reproduction, 1970

B. バーンスティン「階級と教育方法」カラベル
ハルゼイ編「教育と社会変動」上、東京大
学出版会、1980年

宮島喬・田中佑子「女子高校生と家族的条件 —
「文化的」環境を中心として」「お茶の水
女子大学女性文化資料館報」5号、
1984年

藤田英典他「文化の階層性と文化的再生産」「東
京大学教育学部紀要」27巻、1987年（な
お、同論文中では紹介していないデータ
にも本報告では言及している）